

ベトナム語母語話者が使用する日本語語彙学習ストラテジー

天野裕子（九州大学大学院生）

要 旨

本研究は、ベトナム語母語話者の日本語の語彙学習ストラテジーの全体的使用傾向、また習熟度が高い群と低い群による使用傾向の差異を明らかにすることを目的に調査を行ったものである。

全体的な使用傾向については語彙の記憶を強化させる場合よりも新出語の意味を見つけるためによくストラテジーを使用しており、新出語の意味を見つけるためには、辞書や日本語の既知知識など複数のストラテジーを組み合わせ使用し、語彙の記憶を強化させる場合には、認知ストラテジーとメタ認知ストラテジーをよく使用している。更に、ベトナム語に含まれる漢越語の知識を語彙の意味推測や記憶の強化の両方に利用していることも判明した。また、習熟度が異なる2群の学習者グループでは、新出語の意味を見つけるためのストラテジーの使用に有意差が見られた。

【キーワード】 学習ストラテジー 語彙学習 ベトナム語母語話者 漢越語 外国語環境

1. はじめに

第二言語の学習において、語彙習得が重要な役割を果たすことは明らかであり、外国語学習に携わる者は、膨大な語彙をどのように教えればよいかということのみならず、学習者がどのように学んでいけばよいのかという点についても考え、指導に繋げる必要があると考える。しかし、語彙をどのように学ぶのかを明らかにするための「語彙学習ストラテジー」研究は実証的研究によって様々な母語を持つ日本語学習者がどのように語彙を学ぶのかを解明してきた（橋本2007、Mori2010、于2010、アーライヤート2015）が、研究数としては少なく、日本語学習者の語彙学習ストラテジーの使用傾向が十分に解明されているとは言い難い。

また、本研究が対象としている日本語を学習するベトナム語母語話者については、2012年には世界第8位（46,762人）の学習者数（国際交流基金2014）となり、教育システムの変化や日越EPAなどの影響で、その後も増加を続けている。しかしながら、Tuyen（2010）は、ベトナムでの日本語教育の歴史は浅く、ベトナム語母語話者についての研究は僅かであると述べており、2016年現在も対象をベトナム語母語話者に限定した研究は多くない。さらに、現代ベトナム語は英語のアルファベットとほぼ同じクオック・グー文字を使用しているが、「漢越語¹⁾」と呼ばれる漢語起源の語（五

味2005)が6割以上を占めていると言われている(今井2001、五味2005)。そのため、漢字の表記の知識を持たないものの、ベトナム語の「漢越語」の音や意味の知識を日本語の語彙学習の助けにできるという点から、漢字の表記の知識を持つ漢字圏の学習者とも、漢語に関して全く恩恵を受けない非漢字圏の学習者とも語彙学習ストラテジーの使用傾向が異なる可能性が考えられる。

本研究の目的はベトナム語母語話者の語彙学習ストラテジーの使用傾向を解明することである。具体的には、外国語環境の日本語を学習するベトナム語母語話者の語彙学習ストラテジーの使用傾向と日本語の習熟度の高い学習者と低い学習者の使用傾向の差異が見られるかという2点について明らかにする。

2. 先行研究

2. 1. 語彙学習ストラテジーの定義

学習ストラテジー研究は、1970年代前半に教師がどのように教えるかという点から学習者の行動が言語習得にどのような効果をもたらすかという点に注目が移ったことに始まった。それと同時に、言語習得には適性よりも努力が及ぼす影響が大きいことが明らかになり、学習者がどのように学習や目標言語にアプローチし、どのようにそれらをコントロールしているのかに大きな関心が寄せられることになった(Schmitt1997:199-200)。オックスフォードは「学習をより易しく、より早く、より楽しく、より自主的に、より効果的にし、かつ新しい状況に素早く対処するために学習者がとる具体的な行動」(オックスフォード1994:8-9)と定義した。これは学習者が言語習得を成功させるために使用する学習ストラテジーのすばらしさや豊かさを伝えるために考えられたものである。一方、語彙学習ストラテジーと学習ストラテジーの関係については、Nation(2001)が語彙学習ストラテジーは学習ストラテジーの下位分類に属するものであると述べている。

そのため、本研究での語彙学習ストラテジーの定義は「新しい語彙を理解し、学び、記憶することをより易しく、効果的にするための学習者の具体的な行動」とする。

2. 2. 語彙学習ストラテジーの分類

1980年代以降、多くの研究者によって学習ストラテジーの分類が試みられてきたが、最も参考にされている分類はOxford(オックスフォード1994)によるものである。Schmitt(1997)は、Oxfordの学習ストラテジーの分類を利用し、調査用紙を用いて収集した英語学習者の語彙学習ストラテジーを分類している。まず、語彙習得のプロセスを加味し、ストラテジー全体を「新出語の意味を見つけるためのストラテジー」と「出会った語彙の記憶を強化させるためのストラテジー」に分類した。それから、Oxfordの6つのカテゴリーの中から、「社会ストラテジー」、「記憶ストラテジー」、「認知ストラテジー」、「メタ認知ストラテジー」の4つを取り入れ、そこに新たに語彙

学習ストラテジー特有のカテゴリーである「決定ストラテジー」を加えた。Oxford (オックスフォード1994) によれば、「社会ストラテジー」とは「学習者が他の学習者とのコミュニケーションをとおして学習していくのを助ける」もの、「記憶ストラテジー」とは「一定の機能を持ち、新しい情報の蓄積と想起を助ける」もの、「認知ストラテジー」とは「学習者がいろいろな方法を使って、外国語を理解し、発話するのに役立つ」もの、「メタ認知ストラテジー」とは「学習者が自ら学習の位置づけ、順序立て、計画、評価といった機能を使って、言語学習の過程を調整する」ものである。更に、Schmittが追加した「決定ストラテジー」とは、新出語彙の意味を見つける際に、個々がどのような種類のストラテジーを使用したのかを記述したものである (Schmitt1997)。これらをまとめると、表1のようになる。

表1 Schmittの語彙学習ストラテジーの分類 (Schmitt1997を基に作成)

新出語の意味を見つけるためのストラテジー	例
・決定ストラテジー	推測、辞書使用
・社会ストラテジー	クラスメイトに意味を聞く
出会った語彙の記憶を強化させるためのストラテジー	例
・社会ストラテジー	ネイティブと話す
・記憶ストラテジー	類義語・反義語・漢越語
・認知ストラテジー	声に出す、単語帳を作る
・メタ認知ストラテジー	メディアの利用、学習の計画

語彙学習ストラテジーの分類においては、研究者によって、その範囲やどのストラテジーをどのカテゴリーに分類するのかという点において見解が分かれているが、将来的に他の分野の学習ストラテジー研究 (漢字のみをターゲットとしたもの等) との比較を容易にするために、本研究では多くの研究で用いられたOxfordの分類に準じ、その上で語彙習得のプロセスを取り入れて開発されたSchmittの分類法を用いることにした。

2. 3. 学習者の使用する語彙学習ストラテジー研究の概観

学習者の習熟度と語彙学習ストラテジーの内、主に「出会った語彙の記憶を強化させるためのストラテジー」との関連を明らかにした研究の中で、目標言語が日本語であるものには、橋本 (2007)、Mori (2010)、于 (2010) があるが、橋本 (2007) とMori (2010) の対象は非漢字圏の学習者であり、于 (2010) の対象者は漢字圏の学習者である。これら3つの研究から、日本語学習者の習熟が高い学習者と低い学習者による語彙ストラテジーの使用傾向の差異については、主に以下の2つの傾向があると

考える。

- (1) 目標言語の習熟度や語彙の成績が低い学習者は単純なストラテジー（何度も見るなど）をよく使用する。
- (2) 目標言語の習熟度や語彙の成績が高い学習者は多くのストラテジーを組み合わせる。特に、メタ認知ストラテジーや、2つ以上のものを結び付けるような複雑なストラテジー（意味と発音、語彙とイメージなど）などの使用が多い。

一方、アーライヤート（2015）は、Schmitt（1997）の「新出語の意味を見つけるためのストラテジー」に焦点を当てた研究を行っている。タイの大学1年生211名に対して調査用紙による予備調査を行ったところ、成績上位者が成績下位者に比べて「新出語の意味を見つけるためのストラテジー」をよく使用していることが判明した。続いて、1年生の成績下位者が実際にどのように語彙学習ストラテジーを使用しているのかを明らかにするために、読みタスクを用いた授業の後のインタビューや授業中のグループワークの録音、調査用紙という複数のデータを用いて複合的な分析を行った。すると、成績下位者は「新出語の意味を見つけるためのストラテジー」をよく使用しているものの、知識の不足から推測が困難な場合があること、辞書をよく使用しているが、使い方がわからず正確な意味を知る事ができないケースがあったことを指摘している。

最後に、ベトナム語母語話者の漢字学習ストラテジーの調査を行ったTuyen（2010）によると、ベトナム語母語話者は漢字学習の際に「繰り返して書く」など母語に関係なく使用可能なストラテジーをよく使用する一方、「漢越音を覚える」「漢越音から連想する」などベトナム語母語話者特有のストラテジーも多用していると述べている。この研究から得られる知見は同じベトナム語母語話者を対象にした研究であることから参考にできる点もあるだろうが、漢字のみの学習ストラテジーと語彙全体の学習ストラテジーとは異なる可能性もある。

以上、日本語の語彙学習ストラテジーに関する先行研究を概観してきたが、ベトナム語母語話者が対象の日本語の語彙学習ストラテジー研究は行われておらず、ベトナム語母語話者がどのようにして日本語を学習しているのかは明らかになっていない。

3. リサーチクエスション

先行研究をもとに、本研究では2つのリサーチクエスションを設定した。

- (1) 外国語環境のベトナム語を母語とする日本語学習者の語彙学習ストラテジーの使用傾向はどのようなものか。
- (2) ベトナム語を母語とする日本語学習者においても、先行研究と同様に日本語の知識（習熟度）が高い学習者と低い学習者の使用する語彙学習ストラテジー使用に差が見られるか。

4. 調査

4. 1. 調査対象者

2015年3月に、ベトナムのA大学で日本語を学ぶ3年生94名とB大学で日本語を学ぶ3年生38名と4年生31名に、授業時間を利用して質問紙調査と言語テストを行った。その内、無効回答9名、日本の滞在歴が10か月の者2名、学習歴9年の者1名を除外して、A大学3年生87名、B大学3年生35名、4年生29名の計151名の有効回答を得た。151名は全て学習歴が2～3年半程度の20代で、日本滞在歴はなかった。尚、日本語能力試験の取得に関してはN1取得1名、N2取得42名、N3取得57名、N4取得3名、未取得48名であった。

調査対象者を習熟度によってグループ分けするために、筑波大学の言語テストの紙版SPOT-A (60点満点) を行った。3集団得点の平均値は、A大学3年 ($M=37.7$, $SD=8.75$)、B大学3年 ($M=26.1$, $SD=9.48$)、B大学4年 ($M=22.7$, $SD=9.12$) の順であった。担当教師によると、B大学では4年生が複数留学中とのことで、そのことが同大学の3年生よりも平均値が低くなった要因ではないかと思われる。続いて、調査対象者151名を合わせてSPOTの得点順にリスト化し、その上位約30% (47名) を「上位群」 ($M=44.5$, $SD=4.85$)、下位約30% (50名) を「下位群」 ($M=19.4$, $SD=6.31$) とした。この結果の妥当性を調査するため、 t 検定を行った (表2参照)。その結果、両グループに統計的有意差が認められた ($t(95) = 21.80, p < .01$)。

表2 上位群と下位群のSPOTの得点

	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>t</i>	<i>p</i>
上位群	47	44.5	4.85	21.80	**
下位群	50	19.4	6.31		

4. 2. 調査用紙

Bennett (2006) の作成した質問紙 (日・英) を基にした5段階評価 (「1. 全くしない」～「5. とてもしる」) の質問紙を作成した。また、Tuyen (2010) の調査結果から漢越語や漢字と関わる質問項目が必要だと考えて4項目 (「漢越語から意味を推測する」「漢字の部首から意味を推測する」「漢越音を使って覚える」「漢越語との意味の違いに注意して覚える」) を追加した。また、Bennettの質問紙はSchmitt (1997) の分類を基に作成されているものの、Schmittが挙げたストラテジーの内、複数のストラテジーが省略されている。特にメタ認知ストラテジーのカテゴリーでは5項目中2項目が削除されているのだが、Mori (2010) や于 (2010) の調査結果によれば習熟度とのメタ認知ストラテジーには関連があることが指摘されている。そのため、網羅的にメタ認知ストラテジーについて調査をするためBennettによって省略されていた2つの項

目（「毎日（毎週）決まった数の単語を学習する」「自分の興味や専門に関わる単語を学習する」）を追加した。尚、使用言語は全てベトナム語であり、ベトナム語母語話者が翻訳を行っている。質問数は合計で44項目あり、Schmitt (1997) の語彙学習ストラテジー分類の枠組みを基にした、6つのカテゴリーに分類可能である（表3）。分析では6つのカテゴリーごとに平均値を求め、使用した。

表3 調査用紙の質問項目

新出語の意味を見つけるための ストラテジー	例
A. 決定ストラテジー（8項目）	新出単語の品詞（動詞、名詞など…）から、意味を推測する、漢越語から意味を推測する、漢字の部首から意味を推測する
B. 社会ストラテジー（意味）（2項目）	クラスメイトに意味を聞く
出会った語彙の記憶を強化させるための ストラテジー	例
B. 社会ストラテジー（記憶強化） （3項目）	クラスメイトと一緒に勉強する、ネイティブスピーカーと話す
C. 記憶ストラテジー（19項目）	絵を描いて覚える手助けにする、類義語・反義語と結び付ける、新出単語をたくさん使用した文章を書く、新出単語を見たとき、声に出してみる、漢越音を使って覚える、漢越語との意味の違いに注意して覚える
D. 認知ストラテジー（7項目）	声に出す、単語帳を作る
E. メタ認知ストラテジー（5項目）	メディアを利用する、自分の興味や専門に関わる単語を学習する、毎日（毎週）決まった数の単語を学習する

5. 結果及び考察

5. 1. 全体の語彙学習ストラテジーの使用傾向

得られたデータはSPSS 23 for Windowsで分析を行った。まず、外国語環境のベトナム語母語話者がよく使用する語彙学習ストラテジーを明らかにするために、調査対象者全員、上位群、下位群のカテゴリーごとの平均値と標準偏差を求めた（表4）。

ここでは、全体の結果について述べる。分析の結果、よく使用されている順に、決定ストラテジー（ $M=3.59, SD=.42$ ）>社会ストラテジー（意味）（ $M=3.48, SD=.72$ ）>認知ストラテジー（ $M=3.39, SD=.63$ ）>メタ認知ストラテジー（ $M=3.35, SD=.58$ ）>記憶ストラテジー（ $M=3.15, SD=.44$ ）>社会ストラテジー（記憶強化）（ $M=2.83, SD=.56$ ）となった。

このことから、まずベトナム語母語話者は「出会った語彙の記憶を強化させるため

表4 カテゴリーごとの平均

	全体		上位群		下位群		<i>t</i>
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	
決定ストラテジー	3.59	.42	3.71	.39	3.42	.42	3.45**
社会ストラテジー (意味)	3.48	.72	3.40	.78	3.43	.61	-.18
社会ストラテジー (記憶強化)	2.83	.56	2.85	.55	2.76	.58	.80
記憶ストラテジー	3.15	.44	3.10	.47	3.15	.47	-0.51
認知ストラテジー	3.39	.63	3.31	.64	3.50	.56	-1.61
メタ認知ストラテジー	3.35	.58	3.30	.59	3.44	.57	-1.21

のストラテジー（社会/記憶強化、記憶、認知、メタ認知）」よりも、「新出語の意味を見つけるためのストラテジー（決定、社会/意味）」をよく使用していることが分かる。

続いて項目ごとの分析の結果、「新出語の意味を見つけるためのストラテジー」に含まれる各項目は全体的によく使用されていたが、特に決定ストラテジーに含まれるA6「日越辞書を使う」($M=4.55, SD=.60$)、A2「単語の中の知っている部分から、意味を推測する」($M=3.95, SD=.76$)、A3「漢越語から、意味を推測する」($M=3.94, SD=.82$)、社会ストラテジーのB2「クラスメイトに意味を聞く」($M=3.90, SD=.84$)などの使用が多いことが分かった。アーライヤート(2015)の調査結果と同様に、ベトナム語母語話者もまた、辞書の使用、日本語の既知知識の利用、クラスメイトとの協力など複数の「新出語の意味を見つけるためのストラテジー」を組み合わせて使用している。また、ベトナム語母語話者にしか見られない特徴として、漢越語による意味の推測もよく行っていることが明らかになった。

一方、「語彙の記憶を強化させるためのストラテジー」の中では、記憶ストラテジーのC11「どのように発音するか覚える」($M=3.99, SD=.82$)、C12「新出単語を見たとき、声に出してみる」($M=3.80, SD=.99$)、C18「漢越音を使って覚える」($M=3.59, SD=.93$)、認知ストラテジーのD5「授業中、メモを取る、又はマーカーを引く」($M=3.86, SD=1.08$)、D2「何度も書く」($M=3.79, SD=1.02$)、メタ認知ストラテジーの「メディアを利用する(歌、映画、インターネットなど…)」($M=3.64, SD=.94$)、「何度も復習する」($M=3.54, SD=.94$)、「自分の興味や専門に関わる単語を学習する」($M=3.66, SD=.86$)などの使用が目立った。

このことから、まず、漢越語の知識を意味推測のためだけではなく、記憶するためにも利用していることが明らかになった。また、「何度も書く」というストラテジーはTuyen(2010)の調査結果とも共通している。それから、「どのように発音するか覚え

る」や「声に出してみる」というストラテジーの使用も高かった。松田 (2016) はベトナム語母語話者の日本語音声の産出の不自然さは他言語母語話者より顕著であり、日本語教師もその指導に困難を感じる者が多い (p.173) と述べているが、語彙を記憶する際に、学習者自身が音声に意識を向けている可能性があるというのは興味深い点である。最後に、メタ認知ストラテジーのカテゴリーの結果からは、自分の関心や専門と語彙学習を結びつけて学習を進めていることが明らかになった。Tuyen (2010) の調査では、「インターネット」の使用が低いことが指摘されている。原因の1つとして、質問紙の問い方が考えられる。本調査では「メディアを利用する (歌、映画、インターネットなど…)」と具体例をあげて質問をしたが、Tuyenの質問紙の「インターネットを使用する」は抽象的であり、インターネットによって具体的に何をするのかは調査協力者の理解によって異なったために、使用が低いという結果になったのではないだろうか。

最後に、全体の平均値が低いストラテジーはC1「絵を描いて覚える手助けにする」($M=1.76, SD=.87$)、C9「新出単語をたくさん使用した文章を書く」($M=2.38, SD=.92$) などであり、工夫が必要なアウトプットはあまり好まないようである。Tuyenの調査では語彙と字源やストーリーを結び付けるストラテジーの使用が少ないという言及があったが、絵を描くストラテジーは語彙と他のもの (ここでは絵) を結び付けるという点で類似性がある。また、本調査の調査対象者の日本語のレベルは中級以上であり、中級以上の語彙は抽象的であるため、絵を描くことが困難である可能性も考えられる。この点については初級学習者との比較が必要である。C9については、Gu and Johnson (1996) の中国人英語学習者の調査において、語彙の使用を重視するという考えを持つにも関わらず、語彙を使用するストラテジーの使用が低いという結果が出ており、これに関してGu and Johnsonは語彙の使用に関するストラテジーは時間や努力が必要とされるため、低くても当然であると述べている。本調査においても、他の項目と比較して「新出単語をたくさん使用した文章を書く」ストラテジーには時間や努力が必要であるため、使用が少ないと考えられる。

5. 2. 言語テスト上位群と下位群との差

続いて、上位群と下位群において語彙学習ストラテジーの使用傾向に差が見られるかを考察するために、6つのカテゴリーの平均値を比較する (表4参照)。

上位群は平均値が高いほうから、決定ストラテジー ($M=3.71, SD=.39$) > 社会ストラテジー (意味) ($M=3.40, SD=.78$) > 認知ストラテジー ($M=3.31, SD=.64$) > メタ認知ストラテジー ($M=3.30, SD=.59$) > 記憶ストラテジー ($M=3.10, SD=.47$) > 社会ストラテジー (記憶強化) ($M=2.85, SD=.55$) となった。

一方、下位群は平均値が高いほうから、認知ストラテジー ($M=3.50, SD=.56$) > メタ認知ストラテジー ($M=3.44, SD=.57$) > 社会ストラテジー (意味) ($M=3.43, SD=.61$)

表5 上位群と下位群の下位項目による差異

	上位群		下位群		<i>t</i>
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	
A3：漢越語から、意味を推測する	4.06	.67	3.60	.95	2.79**
A7：日本語の国語辞典を使う	3.57	.93	2.66	1.35	3.91**
C1：絵を描いて覚える手助けにする	1.55	.83	2.06	.95	-2.83**
E4：毎日（毎週）決まった数の単語を学習する	2.72	.83	3.24	.94	-2.87**

>決定ストラテジー ($M=3.42, SD=.42$) >記憶ストラテジー ($M=3.15, SD=.47$) >社会ストラテジー（記憶強化）($M=2.76, SD=.58$) となった。

これらの結果から、上位群は「語彙の記憶を強化させるためのストラテジー（社会/記憶強化、記憶、認知、メタ認知）」よりも、「新出語の意味を見つけるためのストラテジー（決定、社会/意味）」をよく使用していることが分かる。一方、下位群が最もよく使用するストラテジーは認知ストラテジーであり、これは先行研究（橋本2007、Mori2010、于2010、アーライヤート2015）が指摘した、習熟度の低い学習者が単純なストラテジー（何度も見るなど）をよく使用するという点と共通している。

しかし、下位群は認知ストラテジーに次いでメタ認知ストラテジーの使用が高く、この点は先行研究の調査結果とは異なる。上位群はC1「メディアを利用する」($M=3.72, SD=1.09$)、C5「自分の興味や専門に関わる単語を学習する」($M=3.74, SD=.79$)については使用が高かったが、C2「自分で単語テストする」($M=2.64, SD=.97$)、C4「毎日（毎週）決まった数の単語を学習する」($M=2.72, SD=.83$)は使用が低かった。後者のC2とC4はメタ認知ストラテジーの一部である「学習の計画」や「学習のコントロール」という概念によってカテゴライズされた項目であるが、質問が先行研究に比べると具体的で限定的過ぎたために平均値が低くなった可能性がある²⁾。

次に、これらの平均値を利用して、対応のない*t*検定を行ったところ、決定ストラテジーの平均値については、上位群の平均値が下位群よりも有意に高かった ($t(95)=3.45, p<.01$)。しかし、社会ストラテジー（意味）、社会ストラテジー（記憶強化）、記憶ストラテジー、認知ストラテジー、メタ認知ストラテジーについては有意差が認められなかった ($t(87)=-.18, n.s.; t(95)=.80, n.s.; t(95)=-.51, n.s.; t(95)=-1.61, n.s.; t(95)=-1.21, n.s.$)。アーライヤート(2015)は質問紙調査の結果、「新出語の意味を見つけるためのストラテジー（決定、社会/意味）」は初級日本語学習者の成績上位者によく使用されていることを明らかにしているが、本調査の結果もこれと一致した。

続いて、カテゴリーの平均値では見えない細かな差異がないかを見るために、44項目のストラテジーそれぞれに対しても対応のない*t*検定を行った。その結果を有意差

が見られた項目のみ抜粋して表5にまとめた。有意差が見られた項目は、A3「漢越語から、意味を推測する」($t(88.5) = 2.79, p < .01$)、A7「日本語の国語辞典を使う」($t(87.1) = 3.91, p < .01$)、C1「絵を描いて覚える手助けにする」($t(95) = -2.86, p < .01$)、E4「毎日(毎週)決まった数の単語を学習する」($t(95) = -2.87, p < .01$)の4項目であった。

上位群の平均値が下位群よりも有意に高かったのはA3「漢越語から、意味を推測する」とA7「日本語の国語辞典を使う」の2項目であり、これらはどちらも決定ストラテジーに含まれる。この結果から、上位群は下位群と比較して新しい語に出会った際に母語の漢越語の知識を使って意味を推測し、日越辞書だけではなく、日本語の国語辞典を使用して正確な意味や用法を知ろうとしていることがわかる。アーライヤート(2015)はスマートフォンの日泰辞書のアプリに掲載された意味や例文が不十分であることを指摘しているが、日本語教育の歴史が浅く、日本語教育研究が僅かである(Tuyen2010)ベトナムにおいても日越辞書や越日辞書の内容が不十分であるために、正確な意味を知りたい、より多くの例文に触れたいと考えている上位群が日本語の国語辞典を使用しているのではないだろうか。この点については今後、辞書の充実度の調査や質的調査によって学習者の具体的な辞書の使用法や意識について調査したい。

一方、下位群の平均値が上位群よりも有意に高かったのはC1「絵を描いて覚える手助けにする」E4「毎日(毎週)決まった数の単語を学習する」の2項目であった。C1「絵を描いて覚える手助けにする」を下位群が多く使用している要因としては、調査対象者のレベルが考えられる。調査対象者はJLPTのN2とN3を取得している者が約半数でレベルは中級以上である。上位群はN2を既に取得済みの者が多く、学習する語彙の抽象性から、絵には描き表しにくいのではないかと思われる。また、E4「毎日(毎週)決まった数の単語を学習する」は、自分の学習を計画的に進めるメタ認知ストラテジーに含まれるものであり、多くの先行研究では習熟度が高い学習者がより多く使用するといわれているが、本調査の結果では上位群よりも下位群のほうが多く使用していた。上述したとおり、E4の質問は先行研究よりも限定的であることから、このような結果になったと考えられる。

また、先行研究からは語彙と他の物(イメージ、音、経験)を結びつけるようなストラテジーについて、習熟度が高い学習者が低い学習者よりもよく使用していることが指摘されていたが、C1の「絵」以外の項目では有意差が見られなかった。この原因については、今後インタビュー調査などを行って質問項目の理解や考え方を確認する必要がある。

6. まとめ

本研究では、ベトナム語母語話者の日本語の語彙学習ストラテジーの使用傾向及び

日本語の習熟度が高い学習者と低い学習者による使用傾向の差異を明らかにすることを目的に調査を行った。

全体的な使用傾向として、「語彙の記憶を強化させるためのストラテジー（社会/記憶強化、記憶、認知、メタ認知）」よりも、「新出語の意味を見つけるためのストラテジー（決定、社会/意味）」をよく使用していることが判明した。ベトナム語母語話者は他の母語話者と同様に、辞書、日本語の既習語彙や漢字の知識等複数を組み合わせて使用し、新出語の意味を推測する。また、ベトナム語母語話者の特徴として、漢越語の知識を用いて、新出語の意味を推測していることも明らかになった。一方、語彙の記憶を強化させる場合には、認知ストラテジーとメタ認知ストラテジーをよく使用しており、記憶するために何度も書いたり、授業中に重要な語彙を選定してメモをしたり、自分の関心や専門と語彙学習を結びつけたりしている。しかしながら、社会ストラテジー（記憶強化）と記憶ストラテジーはあまり使用されておらず、他者と協力して学んだり、工夫したアウトプットを行ったりするストラテジーはあまり使用していないことが明らかになった。

続いて、上位群と下位群のストラテジー使用傾向の差異については、全体でも多かった「新出語の意味を見つけるためのストラテジー（決定、社会/意味）」を、特に上位群が多く使用していることが明らかになり、その中でも漢越語の使用と日本語の国語辞典の使用に関して有意差が見られた。つまり、日本語の習熟度が高いグループは低いグループと比較して、新出語の意味をより多く正確に見つけようとしていると考えられる。反対に、メタ認知ストラテジーの「毎日（毎週）決まった数の単語を学習する」というストラテジーに関しては、下位群の使用が有意に高かった。

ベトナム語の漢越語については、新出語の意味を推測したい場合にも記憶の強化を行いたい場合にもよく使用されている。しかしながら、日本語と漢越語は形や意味にズレがある場合も多く、意味理解やアウトプットの誤りを引き起こすこともある（宮原2000、2002）ため、そのデメリットも意識する必要があるだろう。

Mori (2010) は日本語の習熟度の高いグループは、習熟度の低いグループと学習時間が同等であっても、学習状況をモニターし、学習時間を多岐に分配してよりアクティブに学習していると述べており、于 (2010) もまた習熟度の高いグループが複数のストラテジーを組み合わせて使用していることを指摘している。このことは、ただ1つの絶対的に有効なストラテジーが存在するわけではなく、様々な語彙学習ストラテジーについての知識を持ち、うまく組み合わせることが語彙学習の促進に繋がることを示唆している。そのため、教育の現場では今回使用が低いことが明らかになったストラテジーのメリット・デメリットや使用方法を優先的に紹介し、それぞれの学習者が自分に合うストラテジーを見つけ出す手助けをするとよいのではないかと考える。

最後に、本調査では調査対象者がベトナム語母語話者の内、ベトナムの大学生に限

定されているため、調査対象者を増やし、環境や学習の目的の異なる学習者を対象にして更に調査を進めたい。更に、質問紙のみの調査では回答の意図や使用方法の詳細を明らかにする点では限界がある。そのため、インタビュー等を組み合わせて今回明らかにできなかった点や、上位群と下位群に使用の差が出た決定ストラテジーについて実際にどのような手がかりで推測を行っているのか、漢越語や辞書をどのように利用しているのかという点について明らかにしていきたい。

注

- 1) 例えば、漢越語の“chú y”という語はカタカナで書き表すなら「チューイー」で、日本語の「注意」という語に非常によく似た音であり、意味の一致も見られる。また、漢越語には中国南方から入った漢字音が多く、現代日本語の漢語音に多い呉音との類似も指摘されている（松田他2008）。
- 2) Mori (2010) の調査方法はメールやインタビューの分析を用いた質的調査であり、于 (2010) はOxford の SILL (Strategy Inventory for Language Learning) 7.0版を基に調査用紙を作成しているが、SILLのメタ認知ストラテジーカテゴリーの質問項目は「いろいろな方法を見つけて英語を使うよう心掛ける」(オックスフォード1994:252)などで、本調査の質問紙の質問項目よりも抽象的である。

参考文献

- アーライヤート・ガン (2015) 「特定課題研究報告 タイ人初級日本語学習者の語彙学習ストラテジーの使用実態—補習授業受講者を対象にして—」『日本言語文化研究会論集』11、39-65
- 今井昭夫 (2001) 「ベトナムにおける漢字と文字ナショナリズム—漢字・漢文からローマ字表記のベトナム語へ—」『ことばと社会』5、126-143
- 国際交流基金 (2014) 『日本語教育 国・地域別情報 ベトナム2014年度』
<<https://www.jpj.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2014/vietnam.html>> (2016年4月7日 アクセス)
- 五味政信 (2005) 『ベトナム語レッスン初級1』スリーエーネットワーク
- 橋本ゆかり (2007) 「初級日本語学習者の言語知識の量的側面と語彙学習ストラテジーの関わり—ハンガリーの日本語学習者を対象に—」『ICU日本語教育研究』4、21-36
- 松田真希子、タン・ティ・キム・テュエン、ゴ・ミン・トゥイ、金村 久美、中平 勝子、三上 喜貴 (2008) 「ベトナム語母語話者にとって漢越語知識は日本語学習にどの程度有利に働くか—日越漢字語の一致度に基づく分析—」『世界の日本語教育・日本語教育論集』18、21-33
- 松田真希子 (2016) 『ベトナム語母語話者のための日本語教育—ベトナム人の日本語学

- 習における困難点改善のための提案—』春風社
- 宮原彬 (2000) 「日本語文例理解の困難点—ベトナム在住ベトナム人学習者の場合—」
『長崎大学留学生センター紀要』 8、61-81
- 宮原彬 (2002) 「日本語作文とその母語訳から見たベトナム語母語話者の日本語学習上
の問題点—母語の干渉を中心に—」『長崎大学留学生センター紀要』 1-24
- Than Thi Kim Tuyen (2010) 「非漢字圏日本語学習者の漢字学習ストラテジーに関する
実証的研究—ベトナム人日本語学習者を対象として—」『UILS』
< <http://data.ulis.vnu.edu.vn/jspui/bitstream/123456789/1320/1/TUYEN%20%20than%20thi%20kim%20tuyen.doc> > (2014年4月7日 アクセス)
- 于琰 (2010) 「高級日语学習者の言語学習策略—基于广东外语外贸大学的调查—」『日
語学習と研究』 3、148、89-93
- Bennett, P. (2006). An evaluation of vocabulary teaching in an intensive study program
(Unpublished M.A. thesis, University of Birmingham, Birmingham, United Kingdom
University of Birmingham).
- Gu, Y. and Johnson, R. (1996). Vocabulary learning strategies and language learning outcomes.
Language Learning, 46, 4, 643-679.
- Mori, S. (2010). Japanese language learning strategies by high and low achievers. 『小出記念日
本語教育研究会』 18, 41-61.
- Nation, P. (2001). *Learning vocabulary in another language*. Cambridge, UK: Cambridge
University Press
- Oxford, R. (1990). *Language learning strategies: What every teacher should know*. New York,
USA: Newbury House (オックスフォード、宍戸通庸・伴紀子 (訳) (1994) 『言語
学習ストラテジー 外国語教師が知っておかなければならないこと』 凡人社)
- Schmitt, N. (1997). Vocabulary learning strategies. In N. Schmitt & M. McCarthy (Eds.)
Vocabulary: Description, acquisition and pedagogy, (pp.119-227).Cambridge, UK:
Cambridge University Press.

調査にご協力頂いた福岡工業大学教授の徳永光展先生、ハノイ大学のNguyen Thi Lan Anh先生、フエ大学外国語大学日本語日本文化学部の佐藤もも先生、ご回答頂いた大学生の皆様深く御礼申し上げます。また、本研究の実施においては、筑波大学留学生センターが開発したTTBJ (SPOT) を使用しました。TTBJの詳細は「<http://ttbj.jp/>」をご参照ください。